

やどかり出版『響き合う街で 103 号』に、当法人職員の篠原と鶴田が共同で寄稿いたしました。是非お手に取っていただければ幸いです。電子書籍版もあります。

新刊案内

精神保健福祉ジャーナル
響き合う街で 103 号

特集 身体拘束を通して 精神医療の構造的問題を問う



2022.11 発行 B5 判 62 頁 定価 (本体価格 1,200 円+税)

日本の精神科病院における身体拘束が増加し、高止まりの状況だ。精神保健福祉法には、「入院患者の処遇は、患者の個人としての尊厳を尊重し、その人権に配慮しつつ」とある。果たして現状はどうだろうか。もちろん、現場で懸命に当事者に寄り添う医療従事者もいるはずだ。本人の生命を守るために、やむなく拘束せざるを得ない現実があることも想像に難くない。しかし、患者の人権が蔑ろにされている事実にごそ目を向けなくてはならない。当事者から語られる拘束の体験は、人間の尊厳を傷つけ、回復を妨げる。

「人の自由を奪うこと」が、いかに大きな問題をはらんでいるか、私たちは常にその意味を問い続けなくてはならない。今号は、身体拘束の背景にある、精神医療の構造的問題に迫った。

◆主な目次

- 身体拘束と人権をめぐる動向 増田 一世
- 第1部 身体拘束が人生に及ぼすもの
私の体験 工藤恵 / C.W / 渡邊昌浩 / なかむらなつみ
身体拘束が患者に与える影響 宮本有紀
- 第2部 身体拘束がなくなる理由
身体拘束を実際に行う立場から考える 佐々木和敏
地域の抱える諸課題 安保寛明
- 第3部 身体拘束の現状を変えるヒント
漫然と繰り返されるケアからの解放 佐野智子
他者を「縛る」実践は、私たちにすべてを問い直させる 小村絹恵
スウェーデンの取り組みと私たちの実践 篠原宏江、鶴田裕
- 特別対談
身体拘束の「理想」と「現実」から 長谷川利夫×山田多佳子